

# 最優秀賞

『「俺たちの時代」と「私たちの時代」』

龍澤 史菜 様

都留文科大学 文学部 比較文化学科 4年

さて、まず初めにテーマである「パチンコを国民大衆の気軽な遊びとして多くの人が参加する産業とするためには」について少し考えてみたい。つまりは、テーマから推察するに年々人々のパチンコ離れが多くなり、産業として見てもそこで働くことを積極的に賛成する人々が少なく、パチンコに対する悪いイメージがまだ払拭しきれていない、とそんなところだろうか。

私はこの春からパチンコ会社に入社する予定の者であるが、今までの人生で1度もパチンコ店に入ったこともやったこともなかった。身近にパチンコをする人がいなかったのも理由の1つだが、良いイメージははっきり言うとなかった。しかし、就職活動の際、パチンコは怖いものでもないし、「気軽な娯楽」であることがわかった。だから私はこの業界に入ってみようと思えたのだ。しかし、多くの人々はパチンコのことについてあまり知ろうともしないのではないのだろうか。やはり私が数か月前までもっていた「イメージ」のせいだろう。この業界は昔の「悪いイメージ」を大きく改善する努力をかさねてきたのは事実である。しかし、なぜ業界のイメージが払拭されないのだろうか。このままではイメージが悪いことからパチンコからみんなが離れていく「負の連鎖」が続いてしまう。今回、この諸悪の根源であると考えられるイメージをどのようにしたら変えることができるのかを考えていきたいと思う。

私は学生時代、居酒屋でアルバイトをしていた。お客様のほとんどは50～70代ぐらいが多かった。そこでよく耳にしていた言葉がある。「最近の子はたばこも吸わないし、酒も飲まない。車もほしくない。一体何を楽しみに生きているのだろうかね」。実際私自身もたばこは吸わないし、酒は飲み会や打ち上げという場所ならば多少嗜む程度でプライベートではほとんど飲まない、まさに「最近の子」の1人であった。身の回りの同年代でも酒が好きでたばこも吸う子なんてめったに見なかった。それに加え、私たち学生は経済面から考えても酒やたばこなどの嗜好品を買う余裕はほとんどなかった。せいぜい菓子を買うぐらいだし、なくてもいい、といった感覚である。とにかくたばこや酒にさばける金銭的余裕はないし、学費を自分で出してる子なんかはアルバイトをしてほとんど金は学費に消えてしまい、嗜好品を買う余裕などない。お客様のほとんどが酒を水のように大量に飲み、オーナーもまたお客様と同じぐらいの年齢、ヘビースモーカーで酒もよく飲む人だった。そんな環境にいと、よく説教をされた。キーワードは「俺たちの時代はな」である。そんなお客様たちの「俺たちの時代」は聞いた限りではものすごい景気のよいバブルの時代だったそうだ。私たちより短い勤務時間で今の2、3倍近くはもらえたようだ。実にうらやましい話だ。そりゃあ、私だってお金と時間があるならいろいろとやってみたいし、ゲームセンターも大好きだからそこで心行くまで投資して遊びたいものだ。でもできない。

つい最近の話だ。2017年1月9日の朝日新聞に掲載された投書がネットやニュース番組で多くとりあげられた。内容は以下である。

“「居丈高なシニアに知ってほしい」 会社員 今村 有里(埼玉県 52)

娘は大学に入ってから居酒屋でアルバイトをしている。深夜勤務もして、大学生活のための資金を稼いでいる。大みそかも仕事で、元旦にクタクタで帰宅したが珍しく腹を立てていた。聞くところだ。シニアの男女のグループが飲み物のグラスを割った。娘がガラス破片を集めていると、女性の1人が（早くふいてちょうだい）と居丈高にせかしてきた。「ごめんなさい」といった言葉は一切なかったという。このようなシニアが最近よくいる。スーパーのレジに長い列ができる中で（おい、他に人はいないのか）と声を荒げる男性を見たこともある。こうしたシニアの方々に理解してほしいことがある。企業、特に接客業務で1人が担う労働量はシニア世代が働いていた頃よりずっと多いということだ。労働人口の減少。コスト削減のために人員を切り詰める企業。そうした現実がある。高いサービス水準を求める前に息つく暇もなく働いている人たちの現状を知り、（お疲れ様）という気持ちをもってほしい。”（2017年1月9日 朝日新聞掲載 より引用）

私と同じ研究ゼミの男の子の卒業論文は「ブラック企業について」であった。なぜそのテーマを選んだのかを聞いたら、自分自身がブラックなところで働かされた経験があるから、とのことだった。また、私がパチンコ業界に入ると決心し、いつか店舗見学をしたがやはり圧倒的にシニア世代が多いように見えた。

このように自身の経験と様々な話を組み合わせると、今の若者の像が見えてくる。酒も好きじゃない、たばこも吸わない、のではなく低賃金長時間労働で働かされるため、酒もたばこも「高い」から手に入らない、もしくは金がかかるから手を出さないようにしているのではないだろうか。こうした観点から見ると、今若い人たちにとってパチンコはたばこや酒と同じで、シニア世代が思っている「娯楽」というよりも「ギャンブル」のカラーが強く見えるのではないだろうか。苦勞して手に入れた金で学費を払ったり、ご飯を食べていかなければならない。それだけで精一杯の生活であるのに、長時間低賃金で働いてへとへとになって手に入れた「大事なお金」をわざわざギャンブルにつき込もうとする人はほとんどいないはずだ。こうして、「気軽な遊び」としてのパチンコではなく「金のかかるギャンブル」として若者に捉えられるようになってしまうのだ。こういう事態になってしまってもう若者だけでなく、日本の社会全体が長時間低賃金労働の社会になってしまっているため、大人子ども関係なくパチンコ離れは避けられないと言っても過言ではないかもしれない。

しかし、このままではパチンコ業界は廃れてしまう。何よりもパチンコを楽しみにしているパチンコファンだってたくさんいるのだ。昔のパチンコ店のたばこくさいことや騒音のことなどはほとんどの企業が改善してきた。しかし、パチンコ離れはそれだけでは抑制できない。とにかく、パチンコは「娯楽」である。娯楽は時間と金銭に余裕のある者にしかできないものだ。そのため、私たちは社会全体の流れをそっくり変えていく努力をしなければ、「みんなのパチンコ離れ」に対抗できないだろう。まずは娯楽をしない人に娯楽をさせるためには「時間と金銭」が必要である。社会全体をいきなり変えることは不可能だろう。しかし、まずはパチンコ企業ができる範囲で働く時間を短くして、給料を少しでもよくすれば時間と金銭を与えることができるだろう。結果的にパチンコを知っている人が時間と金銭を手に入れば、パチンコをするようになるかもしれない。パチンコを「娯楽」として感じられるようになれば、新しく新規客を連れてくるかもしれない。また、その「ホワイト企業」っぷりに魅力を感じてあまりパチンコを知らなかった人々もパチンコ業界に働きに来てくれるかもしれない。働いてみる、パチンコを試してみる、新規客をつれてくる、このような流れで不景気の世の中でパチンコ業界が盛り上がる可能性はまだ大いにあるだろう。給料を上げるのは痛手のように見えるが、結果的に客が増えることによって儲けも上がる能性がある。

このようにして、パチンコ業界の働き方にスポットがあたるようになれば他の業界の企業もまねするかもしれない。結果的にみんながある程度の時間で高いある程度よりも高い給料がもらえれば、その余分を「娯楽」に使う可能性は大きいはずだ。これは結果的に長時間低賃金の今の社会を立て直す一種の社会貢献としても見ることはできるはずである。

私たちの時代はいつでも「時間と金」が足りない。それを満たしてこそ、パチンコの業界は成り立つのではなからうか。スーパーの試食のように、まず食べてもらわないと、まずパチンコをやってもらわないとその「おいしさ」はわからない。まずはパチンコをパチンコ業界のみんなに「娯楽」として楽しんでもらうことが、社会貢献となりえる鍵かもしれないと私は考える。